

ファミリー・ランゲージ・ポリシー

福田 牧子（バルセロナ自治大学）

1 はじめに

ヒトの移動が盛んになると共に、トランスナショナルな家族の数も年々増加しています。そのような状況において、言語は避けられない問題の一つですが、ヒトは社会の主流言語ではない言語をいかにして、そしてなぜ次の世代に継承しようとするのでしょうか。この問題をより良く理解するべく、ファミリー・ランゲージ・ポリシー（*Family Language Policy*, 以下 FLP）という分野が誕生しました（段上他, 2022）。言語の継承において、家庭は言語と文化が実践され、次の世代に継承される（片岡・柴田, 2011）場として極めて重要な役割を担っていることは、これまで多くの研究で指摘されてきました（Lee & Shin, 2008; Pauwel, 2005; Schwartz, 2010 他）。Fishman（1991）は、危機にさらされている言語の生き残りにおける家庭の重要性を強調していますが、継承語も社会の主流言語の圧力の中で生き残りを強いられる言語である以上、「危機にさらされた言語」と言えるでしょう。移住のコンテキストにおいて子供が継承語に触れることができるのは、子供にとって初めての、そして主たる相互行為の場である家庭であり、言語維持と移行の考察に最も適したコンテキストであると言えます。

2 ファミリー・ランゲージ・ポリシー

2.1 言語政策とは

FLP の詳細に入る前に、まず「言語政策」（*Language Policy*）という概念について触れておきたいと思います。「言語政策」は国家レベルの政策を連想させますが、必ずしも国家に限定されるものではありません。言語政策は特定の言語に関する目的を達成するための計画や実践を指し、国際連盟のような超国家組織を最大のマクロレベルとし、会社のような組織、そして家庭のようなマイクロな単位でも実施され得るものです（Walsh, 2012）。

言語や言語状況に人間が介入することは古くから行われてきました。言語政策の基礎理念は19世紀のフランスとドイツが領土と言語で国民国家を定義する過程で形成されましたが、「言語政策」や「言語計画」という概念自体が誕生したのは50年代末～60年代であり、比較的最近の話です。元々、言語政策は国家が言語変化をどのように促進するかという視点から「言語計画」(*Language Planning*)として位置づけられており、これは特定の言語に関する目標を達成するための実践的な提案や、コミュニティ内での言語問題を解決するための組織的活動 (Bakmand, 2000; Jahr, 1992), または意図的な言語変化 (Rubin & Jemudd, 1971) を含んでいました。言語計画は言語の地位や形態を定めるもので、特に多言語社会で言語紛争を回避するために必要不可欠なものとして実施されることが多く、計画を実行するためには目標設定とその達成方法が求められます。たとえば一度は死語となったヘブライ語は、地位計画(言語の地位を決定する)、コーパス計画(正書法や辞書など、言語の形態に介入する)、習得計画(誰がどの言語を学ぶのかを決定する)の三つの段階を経て、言語を社会的に普及させることに成功しました。

Haugen (1983) の言語計画モデルでは、国家が言語を選択し、専門家がその標準化を行い、教育で普及させる流れを示していますが、このモデルには住民の意見が反映される仕組みが描かれておらず、言語計画が国家主導で進められるものであることがわかります (カルヴェ, 2000)。ところが、言語政策は言語と社会に関する意識的な選択や目的を持つ活動であり (Shohamy, 2003), 従来の国家や権力機関によるトップダウン型の活動にとどまらず、個人やコミュニティも言語計画の主体となり得ます (Cooper, 1989)。また、言語政策にはイデオロギーが深く関わり、権力や支配の問題と密接に関連していることが指摘されています (Cobarrubias, 1983; Tollefson, 1991)。Bakmand (2000) は言語政策とはイデオロギー的な方向性と見方の表現である、と述べています。

後に言語政策の視点は次第に変化し、国家主導の計画だけでは言語問題を解決するには不十分であるという考えが広がりました。従来、言語政策は「計画」(*Planning*)として主に国家や自治体のトップダウン型で実施されてきましたが、権力は法律や規制だけでなく、実践や信念の中にも作用するという新たな見解が広まり、言語政策の範囲が家庭や教育者を含むものへと拡大し (Shohamy, 2015), 近年では家庭やコミュニティがその中心となることが重要視されるようになりました

(Ricento, 2006)。こうして人の言語の使い方に対する信念や規則、日常的な実践が言語政策に深く影響を与えることが認識されるようになり (Ricento, 2006; Shohamy, 2006; Spolsky, 2004, 2012), 学問分野の名称も「言語政策」へとシフトして行きました (García, 2015 [2001])。このように、言語政策は単なる国家主導の計画ではなく、社会全体での意識的な選択と行動に関連しており、言語使用 (言語をどのように使うか)、言語イデオロギー (言語に対する価値観や信念)、言語管理 (言語使用をいかにコントロールするか) という三つの要素を含むもの (Spolsky, 2004) と言えます。これにより、家庭という最小単位でも、親や教育者が言語の使い方に関与することが重要になり、これが FLP という新しいアプローチへとつながって行きました。

2.2 ファミリー・ランゲージポリシー (FLP)

2.2.1 FLP の誕生

以上述べてきたように、従来の言語政策研究は公的機関が定めた政策を効率的に現場へ適用することに焦点を当ててきました。しかし、トップダウン型の政策が意図通りに現場で実現されることは少なく、現場の実情を重視しなければ政策の本質を理解できないという視点が提起されました。こうした背景から、家庭という私的な領域における言語使用が言語政策という枠組みで捉えられるようになり、言語政策の文脈の中で個々人の言語使用が再解釈されることとなりました (段上他, 2022)。こうして、家庭を言語政策の主体と見なす新たな視点が生まれ、FLP の概念が誕生しました。

社会の主流言語とは異なる言語を次世代に伝える際、家庭が極めて重要な役割を担うことは、多くの研究によって明らかにされていますが、特に移住者やエスニック・マイノリティの言語の保護において強調されてきました。家族による言語に関する決定や実践は、少数派言語が世代を通じて継承されるか否かを左右する重要な要因であり (Fishman, 1991), その意味で FLP は、子どもの言語発達や親子間の相互行為を形成する枠組みとして重要な研究分野とされています (De Houwer, 1999)。さらに、個人や家庭が言語の維持や変化にどのように寄与しているかを探る新たな領域として、FLP は発展を続けています。

2.2.2 FLP の歴史的背景と FLP 研究の発展

多言語家庭における子どもの言語使用は親の管理を通じて形成される、という考え方は 20 世紀初頭から存在していました。事実、「一人一言語 (One Person-One language)」の概念が子供の二言語習得に有効な手段として言語学者の Grammont (1902) によって導入されたのは 20 世紀初めです。ところがそれ以降、80 年代に子供のバイリンガル習得が再び脚光を浴びようになるまでは、**さほど目立**ったバイリンガル家庭における子供の言語発達に関する長期的な研究はありませんでした (Wilson, 2020)。これは、かつてバイリンガリズムが子どもの全体的な発達を妨げるという根強い誤解が広く信じられていたためです。やがて 1980 年代から 1990 年代にかけて言語に対する考え方が徐々に変化し、言語が個人と社会の関係を仲介する役割を持つという認識が現れ、子どものバイリンガリズムに関する研究が再び盛んになっていきました。これを契機に、バイリンガリズムに対する否定的な言説も変化していきました。

また、この時期には従来の「バイリンガル話者=X 語のモノリンガルと Y 語のモノリンガルの総和」という見方から、「全体としての多言語話者」として捉える視点への転換が起きました。この転換は、バイリンガリズムをより包括的に理解する上で重要な進展をもたらしました。

2.2.3 FLP の独立分野としての確立

FLP は言語政策のマクロとミクロの間のギャップを埋める概念として登場しましたが、それ以前は家庭内の言語政策は、言語継承や言語政策研究において、長らく二次的なテーマとされてきました (Kopeliovich, 2010; Spolsky, 2009)。しかし、家庭が言語の維持や変化に果たす役割への注目が高まるにつれ、FLP は言語政策研究における不可欠な分野となって行きました。さらに FLP 研究の進展により、家庭という私的な空間と社会的・政治的影響との相互作用が明らかにされ、多言語社会における家庭の役割が一層注目されるようになりました。こうして FLP の概念は、言語心理学者や社会言語学者の高い関心を集め、「ファミリー・ランゲージ・ポリシー」という名称で独立した研究分野として扱われるようになりました (Guardado, 2017)。FLP 研究は、社会言語学や人類学、言語的社会化の手法を取り入れた学際的な分野であり、子どもの言語習得や言語発達、第二言語習得、バイリンガリズム、言語政

Commented [N11]: ぼっと読んだ感じ、「さほど目立った」が「バイリンガル家庭における」にかかった感じに聞こえるので、「バイリンガル家庭における子供の言語発達に関するさほど目立った長期的な研究はありませんでした」、もしくは「バイリンガル家庭における子供の言語発達に関する長期的な研究は、さほど目立ったものはありませんでした」にするのはどうでしょうか。福田さんのおっしゃりたいことは、つまり、これまで「さほど目立った研究がなかった」ということですね。確認お願いします。

Commented [MF2R1]: はい、その通りです。こちらにお返事をするのを忘れ、大変失礼いたしました！

策、言語イデオロギーなど、幅広い領域に関連しています (Kheirkhah, 2016)。これらの研究は、かつてのファミリー・バイリンガリズム研究に確固として基づきながら発展してきました。

2.2.4 FLP とは

Curdt-Christiansen (2013:1) は FLP 研究について、「ある国際結婚家庭は自分たちの言語を維持する一方で、他の家族はその言語を失ってしまうのか？なぜ、主にモノリンガル社会で育つ子どもがバイリンガルになる一方で、バイリンガル環境で育つ子どもがモノリンガルになることがあるのか？親は特定の言語の使用や学習を促進または抑制するためにどのような方針や実践を取り入れているのか？そして、これらの言語方針や実践は家庭内でどのように交渉され、また言語や言語教育に関するイデオロギーとどのように関連しているのか？」といった疑問を研究者が理解しようとし、ここ十数年で注目を浴びてきた分野であると述べています。子供の言語発達および保護者と子供の間の相互行為の枠組みを形作る *Family Language Policy* という言葉自体が初めて使われたのは、Luykx (2003) がボリビアのアイマラ語とスペイン語を使用する家族を対象とした研究です。Luykx は少数言語の維持において家庭が主な要因であることを明らかにしました。

家庭の言語政策は「見えない政策」とも呼ばれる一方で、国家レベルの言語政策は「見える政策」として対比されることがあります。FLP は、家庭内および家族間で特定の言語使用パターンやリテラシーを実践する試みとして定義されます (King et al., 2008; Curdt-Christiansen, 2009)。具体的には、明示的または暗黙的な形で行われる計画を指し、家族がなぜ、どのようにして複数の言語を維持・発展させようとするのかを明らかにすることを目的としています。その中でも維持の対象となる言語は通常、少数派言語であり、継承語もその中に含まれます (Curdt-Christiansen, 2013; Fogle & King, 2012)。両親が同じ母語を持つ家庭において、特定の言語を使用する選択は比較的容易ですが、両親の母語が異なる場合には、双方の両親の母語を家庭内で維持するための戦略的かつ意図的な努力の結果、バイリンガリズムが生じるのです (Klerk, 2001)。このような決定には政治的影響やジェンダー、感情的要因が関与することが多くあります。

たとえばジェンダーに関しては、これまでの研究では女性の方が自らの母語以外

の言語を習得するのが早く、また適応するのも男性に比べて早いと言われています (Lyon, 1996)。さらに、伝統的な女性のライフスタイルからすると、子供と接する時間も女性の方が男性よりはるかに多く、子供の教育関係は母親の役割と考えられている社会では特にその傾向が強いです。こうした社会の慣習も、使用する言語の決定に大きく影響します。また、母親が家庭内で唯一の継承語話者である場合、自身が言語継承の全責任を負っていると感じ、不安や罪悪感を覚えることもあります。この点については Wilson (2020) も、少数言語の継承において母親の役割が過度に強調される傾向があると指摘しています。継承語が堪能な子供を育てることが期待されている中で、母親は特に子供と親の間の絆、そして家族との絆を重視するなど、言語の継承を決して軽視できない重い責任のあるものとして捉えていることが多くあります Wilson (2020)。

感情面においても、どの言語を誰といつ使用するかという件に関する決定と非常に大きく関わっています。親（特に母親）は子供と親の絆を維持するために、自分の母語を子供に継承できるような形で家庭における言語パターンを決定する傾向があることが指摘されており、家庭内での言語使用パターンの形成に大きな影響を与えています。こうした親による言語使用パターンの決定は、初期段階では比較的明白ですが、時間の経過とともに交渉され、修正されることが多く見られます (Fogle & King, 2012)。

前述の Luykx (2003) と共に言語使用に関する政策を政治的な決定から家庭の決定まで拡大したのは前述の Spolsky (2004) です (Wilson, 2020)。Spolsky のモデルに基づくと、FLP の「実践」は家庭における言語の使用のパターン、「管理」はその言語使用の親によるコントロール、そして「イデオロギー・言語態度」には当該言語およびその使用に対する親の考え方、信念が含まれます。このモデルは、家庭内の言語使用を包括的に捉えるための枠組みとして広く用いられています。

FLP における言語の「実践」は、家庭の様々な文脈における言語選択と言語の好みのパターンを指す (Schwarz, 2010)、とされています。両親の母語が異なると、多くの場合両親は子供に両親それぞれの言語を習得して欲しいと願うものですが、両親のうちのどちらか、あるいは両方の母語が社会の主流言語と異なる場合、その言語を子供にも継承するためには意識的な努力をしなければなりません。社会言語学では、移住者の言語は特別な努力をしなければ、移住第三世代で一世の母語が社

会の主流言語に取って代わられると言われていています。一日の大半を親と過ごしている未就学児は、親が子供の言語使用をある程度まで管理することが可能ですが、学齢期に達して学校に通い始めると、親と過ごす時間が激減し、学校の言語つまり現地語の新しい語彙が圧倒的に増えます (Braun&Cline, 2014)。家庭においても現地語を使用するケースも多く報告されています。そのため、親は社会の少数派言語である継承語を維持するための様々な方策を取ります。これが「言語管理」に相当するもので、「家族の成員、特に子供の言語をコントロールする努力」 (Spolsky 2007:430) を指します。つまり、家庭内で誰がどの言語を誰に話すかを決定し、それを維持するために取られる方法です。なお、「実践」と「管理」は境界が曖昧なことが多いです。

前述の「一人一言語 (One Person-One Language)」 (Grammont, 1902), 「一親一言語 (One Parent-One Language)」 (Döpke, 1992, 以降 OPOL) が最も有名なアプローチの一つでしょう。これは、母語が異なる両親が子供に対してそれぞれの母語のみで話しかけるという方法です。家庭内バイリンガルの研究などでは多言語家庭で最もよく知られ、最も多く実践されてきた方法であると言われていています。バイリンガルだけではなく、トライリンガルの家庭でも使われています (Barron-Hauwaert, 2004; Braun & Cline, 2010)。

Barron-Hauwaert (2004:163-178) は OPOL をさらに「OPOL-ML (One parent, one language – majority language)」, 「OPOL-mL (One parent, one language – minority language)」の二つのタイプに分けました。前者は異なる母語を持つ両親のうちの片方の母語が社会の優勢言語であり、両親の間のコミュニケーションにその言語が使用されているケースです。この場合、少数派言語の使用は少数派言語話者の親と子供との間のコミュニケーションに限られます。後者は同じく両親の母語が異なり、それぞれの両親がそれぞれの母語のみを子供とのコミュニケーションに使いますが、両親間のコミュニケーションにおいても少数派言語が使われている点で前者と異なります。この場合、家庭における子供の少数派言語との接触が多くなり、その使用が促進されます。Barron-Hauwaert は他にも「Minority-Language at Home (mL@H, 家庭内で少数派言語のみを使う)」, 「Trilingual strategy (両親が第三言語も使用する)」, 「Mixed strategy (家庭内でコード・スイッチングを行う)」, 「Time and Place strategy (時と場所によって使用する言語を変える)」, 「Non-Native strategy

（両親のどちらかが母語ではない言語を子供に使用する）」の五つの言語使用のパターンを提示しています。親はこれらの戦略を通して言語使用をコントロールし、二言語あるいは三言語が使用される状況を生み出すのです。

OPOL は子供がどちらの親とどの言語で話すべきかを区別できるようになるという利点がありますが（Braun & Cline, 2014），幅広い文脈で両方の言語が自由に使えるほどのレベルを身に付けている子供がいる一方で，多くの子供がどちらかの言語の能力はるかに発達し，もう一方の言語は理解のみできるという，いわゆる受動バイリンガルになるケースが報告されています（Saunders, 1982; 1988）。これらの差は子供とモノリンガル状況を維持しようとする際の親子間のコミュニケーションスタイルの違い（Lanza, 2004; Takeuchi, 2006）や，それぞれの言語の社会的な地位の違い（King & Fogle, 2006; Tuominen, 1999）によるものと考えられています。他にも，OPOL に関しては，第三者がいる場面では会話が不自然になる，片方の親の言語が理解できない親が会話から外され疎外感を感じる可能性がある，コミュニケーションがとぎれる等の批判があります。

また前述のように，多くの OPOL 研究が少数派言語の継承を母親の責任とみなしていることに対しても厳しい批判が寄せられています。たとえば Okita (2002) の英国在住日英バイリンガル家庭における日本語の継承に関する研究は，そのタイトル *Invisible Work* に母親の言語継承における役割が見事に集約されていますが，OPOL を厳密に実践することは，ただでさえ負担の多い子育てにさらなる負担をかけ，母親の幸福にも影響が及ぶ可能性があることが指摘されています（Yates & Terraschke, 2013）。

他にも Lanza (2007) は親による子供の言語管理の方法として，（1）子供が選択した言語を親が分からないふりをする方法（*Minimal grasp*），（2）親が子供が使用した言語とは異なる言語で問い直す方法（*Expressed guess strategy*），（3）子供の発話を親が子供が使った言語とは異なる言語に訳して言い直す方法（*Adult repetition*），（4）子供の発話に干渉せず，そのまま会話を続けさせる方法（*move-on strategy*），そして（5）親が両方の言語を使う方法（*adult code-switching*）の五つの方法を示しています（図 1）。これらは親が「正しい言語」，つまり子供が親が使うことを期待する言語を使わなかった場合に適用される管理方法です（例：親が日本語で話しかけた場合は子供も日本語で返答することが期待される）。

MONOLINGUAL CONTEXT	Minimal grasp	Adult indicates no comprehension of the child's language choice
	Expressed guess	Adult asks yes/no question using the other Language
BILINGUAL CONTEXT	Adult repetition	Adult repeats the content of the child's utterance, using the other language
	Move on	The conversation merely continues
	Code-switching	Adult code-switches to the other language

図1：親によるディスコース・ストラテジー (Lanza, 1997/2004: 268, Keydeniers, 2022:1 より引用)

Lanza (2004) は (1) を使用した場合に子供の少数派言語の習得が最もうまく行くとしていますが、子供は少数派言語話者の親が社会の優勢言語が理解できないと認識すると、その親の言語でコミュニケーションを取らざるを得なくなります。実際に親の現地語能力が極めて低い場合には有効な方法であることが考えられますが、親が現地語を理解しコミュニケーションが取れることを隠していた場合は、子供が事実を知った時点で効力を失うでしょう。

(2) や (3) は親が「正しい言語」によって子供にはたとえば子供が「正しい言語」で「椅子」という言葉が分からない場合、「それは何か食べるもの？遊ぶもの？やわらかいもの？」などとヒントを出し続け、子供が何を言おうとしているのかを当てていく方法です。いずれも子供が親が期待する言語のみで発話するよう、促す方法ですが、その一方で (4) や (5) は現地語との併用も認めるものです。こうした方法によって子供の言語使用を親が管理し、親が目指す言語使用の状態を作り出していくわけですが、これらはどれも概ねモノリンガルあるいはバイリンガルのコンテキストを作り出す可能性を持つため、図1で示されるように一つの連続体の上に位置付けることができます (Keydeniers et al., 2022)。

以上のような家庭における言語使用の管理に加え、少数派言語の使用を強化するために夏休みなど長期休暇を利用して親の国へ子供と里帰りをする、本を読み聞かせる、継承語学校に通わせる、少数派言語話者の友だちと遊ばせる (親が友だちを選ぶ)、視聴覚メディアの言語を親が決定するなどと言ったこともすべて、親が目標としている言語使用の状態を達成するために、家庭における言語使用を「管理する」方法であると考えられます。

FLP の三要素のうち、イデオロギーや態度は価値観や権力、あるいは言語の有用性にに基づいていることが多いため、言語使用の原動力とみなされています (Curdt-Christiansen 2009; 2013; King et al., 2008)。モノリンガル環境であれバイリンガル環境であれ、子どもの言語環境は幼児期における主要な環境を形成する親の信念や態度に大きく影響されます (Schwarz, 2010)。そのため、FLP 研究では親の言語イデオロギーが果たす役割に注目することが多くあります。実際、言語政策を決定する主体は親であり、親が言語そのものやその使用、さらには継承についてどのように考えているかが理想とする言語使用パターン (どの言語をどのように使うか) の選択や、それを実践するための方法の決定における基盤となります (Curdt-Christiansen, 2013)。このような背景から、FLP は親の信念が言語使用の決定に及ぼす影響を深く理解するための重要な研究分野と言えます (King et al., 2008)。

親の信念や考えは、世の中に多く出回っているいわゆるパブリック・ディスコース (例: 新聞やテレビなどのメディアにおける「カタルーニャ語はスペイン語に比べて有用性が低い」とする記述など) や、政府の政策、両親の移住経験、言語学習経験、教育イデオロギーなどに基づくことが多く、経済的、政治的、社会文化的、そして言語的要因に加え、親の教育経験や期待とも関連し、複雑に絡み合っただけの子供のバイリンガリズムの促進に大きく関わって行きます (Curdt-Christiansen, 2013)。

言語イデオロギーは、継承語を維持する必要性を強調したり、家庭内で社会の主流言語の使用を制限・禁止したり、逆に家庭内での二言語併用を容認したりすることができる (Kheirkhah, 2016) ため、FLP 研究の重要な焦点となっています。これらの選択は、それぞれの家庭が持つ言語や言語使用に関する考え方にに基づいています。このように、FLP の研究は親の言語イデオロギーを通じて社会の言語や子育てに対する態度や価値観を読み解く手段となります (King et al., 2008)。King & Fogle (2012) は親の言語に関する決定は「良い子育て」と「悪い子育て」に関する考えと密接に結びついており、これらはそれぞれの文化的な規範や社会の言説によって形成されるものである、と指摘している。

なお、前述の言語実践と言語に対する信念は区別する必要があります。言語実践は「実際にどのように言語を使用しているか」ということを指し、言語あるいは言語使用に対する信念は「このように言語を使用すべきである」と信じていること自体を指しています (Spolsky, 2004)。これらの間に齟齬が見られるのはごく一般的

な現象であり、実際親が明言するイデオロギーと、子供との言語使用において意識的に、あるいは無意識的に適用されるストラテジーが必ずしも一致しないことが指摘されています（De Houwer 1999; King 2000; Schwartz 2008）。特に OPOL などは「それぞれの親がそれぞれの母語のみを子供とのコミュニケーションに使用し、異なる言語を混ぜない」という理想を堅持するのは実際問題として非常に難しいと考えられます。例えば少数派言語に置き換えると意味が微妙に変わるような言葉などはどうでしょうか。逆に意味が通じず、現地語をそのまま使用した方が正しく理解できるというケースも実際に多くあります。日本でも良く知られている代表的なスペイン料理の一つ、「トルティーリャ」は日本語では「スペイン風オムレツ」と訳されることが多いですが、これも「オムレツ」を「卵焼き」とし、「スペイン風卵焼き」と日本語に置き換えたとしても、実際のところ同一のものを指している訳ではありません。

2.4 FLP の最近の動向

FLP が独立した研究分野となって以来、FLP に関連する研究の数はここ十年ほどで著しく増えましたが、その間に研究の関心事や対象などに様々な変化が現れました。

2.4.1 親から子供へ：視点の変化

初期の FLP 研究は、多言語家庭における言語実践や言語イデオロギーと、その結果との関連に主な関心が置かれていました。なぜバイリンガルに育つ子供がいる一方で、モノリンガルに育つ子供もいるのか、また親が子供の特定の言語（多くの場合、継承語）の使用をどのようにコントロールしているのか、その関連性を理解することが FLP 研究の目的とされてきました（Curdt-Christiansen, 2013）。つまり、親がどのようなイデオロギーに基づいてどのような言語管理を行い、それによってどのような言語使用が生まれるのかという点に注目し、「子供の言語発達を修正することによって継承語を保持しようとする親の努力」（Spolsky, 2012:7）を中心に探求していたのです。

ところが、親の言語イデオロギーや言語政策と実際の言語使用との間に単純な因果関係が存在するわけではありません。親が特定の言語の使用を強化しようとして

も、家庭内の言語使用パターンが親の言語政策の目指す方向と必ずしも一致するとも限りません。これは、子供が成長するにつれて親の努力に反発する場合があるためです。事実、友人と過ごす時間とその重要性が子供の日常生活の中で増えるにつれ、親の指示に容易には従わなくなり、友人たちが使う言語が子供の言語選択に大きく影響を及ぼすことが多々あります。FLP を決定し、実践に移すのは親・保護者であることに変わりはありませんが、その政策を適用される側である子供の存在も無視することはできないのです。子供は親の言語使用を拒否することで家庭内の言語選択を再交渉しようとする場合があります。また、親の言語を話すことを嫌がる態度を見れば、親が妥協して子供の選んだ言語使用に影響されることもあります。逆に、子供が継承語に対する習得不足を示すことで、家族全体の言語使用パターンが変化する場合もあります。このように、家庭における言語使用（実践）は必ずしも親による言語管理の結果ではなく、言語やアイデンティティの選択を通じて FLP が形成され、その過程において子供は重要な役割を果たしています。そのため、近年では子供の主体性 (*child agency*) に注目した研究も増えてきています (Bui et al., 2022; Danjo, 2021; Revis, 2017; Smith-Christmas, 2021; Wilson, 2020 他)。

2.4.2 研究対象の拡大

FLP の誕生に先立つファミリー・バイリンガリズム研究は、主に西洋の中流階級やエリート階級の家庭におけるバランスの取れたバイリンガリズムの発達における親のストラテジーや言語環境などに着目し (Kheirkhah, 2016) , 主に欧米在住で複数のヨーロッパ言語を話す家族を研究対象とする傾向があることも指摘されていました (e.g., King & Fogle, 2013) 。ところが、近年では「家族」という概念や家庭の多様化に伴い、FLP 研究はその視野を広げ、中産階級以外の家庭や養子のいる家庭、LGBT の家庭など、さまざまな社会経済的背景を持つ多様な家族を対象に含めるようになりました。また、言語もヨーロッパ言語以外の言語を含む家庭、移民や難民の家庭などを対象とする研究も見られるようになりました (段上他, 2022) 。たとえばカナダに移住した中国語話者 (Curdt-Christiansen, 2009) , ニュージーランドの難民の家族 (Revis, 2017) , 中国雲南省の多言語の村に住む家族 (Zhang & Li, 2022) , アメリカ在住のリビアからの移住者 (Yazan & Ali, 2018) , 韓国の国際結婚家庭 (Lee & Pang, 2021) などが挙げられます。

2.4.3 「結果」より「意味」を重視

従来の FLP 研究は、特に子供のバイリンガルあるいはマルチリンガル能力の発達に着目し、親がどのような言語管理方法を取ることによって、どのような結果が生まれるのか、という点に関心の中心が置かれていました。つまり FLP の三要素である「実践」「管理」「イデオロギー」の視点から、親の言語管理と言語イデオロギーが子供の言語発達にどのような影響を及ぼすのかという点を重視していました。ところが近年は、家族はいかにして言語に関する決定を行うのか、そしてその決定を変化する状況の中でどのように理解し、家庭における日々の多言語使用をいかに理解するのだろうか、といった点がより注目される傾向があります。子供の少数派言語の能力を大人と子供が自分自身を定義し、家族内の役割や家庭生活を形成する手段としてとらえているのです。さらに、Smith-Christmas (2016) は、FLP の家族と社会の間における相互関係を深く理解するため、それぞれの家庭が置かれた文脈の重要性を強調しています。各家庭はその構成や居住地、使用言語、言語の地位、親の言語的バックグラウンドなどの様々な要素によって異なります。Smith-Christmas (2016) は FLP 研究が広範囲な家庭の経験を正確に反映するためには、これらの文脈的要素を慎重に考慮することが必要不可欠である、としています。

3 具体的なケース：スペイン・カタルーニャ在住の家族のケース

ここでは、スペイン・カタルーニャ在住の日本語継承を試みるトランスナショナルな家庭における FLP を扱った、Fukuda (2021) を具体例とし、FLP の三要素である実践・管理・態度の視点から、日本語の継承を見てみましょう。なお、カタルーニャは国家公用語であるスペイン語と、自治州の固有言語および公用語であるカタルーニャ語が併用されるバイリンガル社会です。

3.1 実践

日本語を母語とする母親がいる家庭では、日本語は主に母親から子供への話しかけで顕著に使用され、子供も現地語を併用することはあるものの、現地語のみを使うケースはあまり見られませんでした。一方、父親が日本語母語話者の場合、親子間の会話では現地語（主にスペイン語）と日本語が併用されるか、現地語のみが使われるケースが多く、子供同士の会話でも現地語が優勢であることが注目されます。

なお、この「現地語」がスペイン語であることが多いのですが、親同士のコミュニケーションの言語がスペイン語であるためのみならず、日本語母語話者の親はたいへい先にスペイン語を習得し、カタルーニャ語を習得してさらに使用に至るケースは少数派であるためです。兄弟姉妹間では、従来の研究が指摘してきた、現地語の優勢な使用は主流ではなく、日本語も一定の割合で使用されていることが確認されました。家族全員が揃う場面では、特にカタルーニャ語母語話者の親を含む家庭では共通言語を定めず、日常的な言語使用パターンが維持されている傾向があるようです。興味深い点として、スペイン語を家族共通語とする家庭が少数派であることが挙げられます。スペイン語を共通語とすると、日本語やカタルーニャ語といった社会的に弱い立場の言語が使われなくなるリスクが高まりますが、社会的に優勢なスペイン語を避けることで、結果的にこのような事態を回避されていると考えられます。

3.2 管理

言語管理の方法として最も広く実践されている一親一言語（OPOL）は、本研究対象の家庭でも最も多く採用されていました。この方法にはさまざまなレベルがあり、言語の混用を徹底的に避ける厳格な実践から、親それぞれが母語を話しつつ混用をある程度許容する寛容な実践まで報告されています。特に寛容な OPOL では、親子間のコミュニケーションにおける理解を重視するために、現地語を混用せざるを得ないことが多く、それが子供の言語使用パターンに影響し、日本語と現地語を併用するパターンに変化する場合もありました。対照的に、家庭内で言語使用に特段の管理を行わない「レッセフェール方式」を採用していた家庭も確認されました。この家庭では日本語の使用が非常に限られており、現地語が圧倒的に優勢でした。これは、家庭内で言語使用をコントロールしない場合、社会の優勢言語が家庭内でも主流になることを示す例だと考えられます。

3.3 言語態度

言語継承に関する親の信念や態度は、子供に日本語を継承する家庭において重要な役割を果たしています。調査対象のほぼ全家庭が日本語継承に対して肯定的な態度を示し、日本語は子供のアイデンティティの本質であり、複言語能力の利点や将

来の可能性、家族とのつながりなどが継承の理由として挙げられました。また、現地社会の多言語に対する肯定的な姿勢や日本語への好意的な評価も継承を後押ししていると思われます。多くの家庭で採用されている OPOL は「親は自分の母語を話すべき」という信念に基づいており、意識的な管理よりも自然な流れでこの方法に落ち着いたという回答が多く見られました。一部の家庭では、混用を避ける徹底的な OPOL が行われていますが、日常生活では言語の分離を完全に実現するのは難しく、現地語の混用が生じることもあります。さらに、カタルーニャの複雑な社会言語状況に対する各家庭の態度も多様です。例えば、カタルーニャ語を支持する立場やスペイン語を優先する立場などがあり、親の考え方は生活環境やパートナーとの関係によって変化することが多いようです。一部の家庭では社会の優勢言語であるスペイン語は自然に身に付くものとして家庭内の共通言語とせず、カタルーニャ語や日本語の使用を強化する努力を行っています。両親がカタルーニャ語母語話者と日本語母語話者の家庭でスペイン語を重視した場合には、カタルーニャ語が脱落し、スペイン語と日本語の二言語が共存する形になりますが、上記の調査研究内ではこのタイプの家庭は確認されませんでした。

4 おわりに

FLP は、家庭という最も身近な場での言語使用や管理の在り方を解明する上で重要な視点を提供してくれる概念です。家庭内での言語使用は、親の態度や価値観、イデオロギーに大きく影響されるだけでなく、子供の成長や家族を取り巻く社会的環境との相互作用によっても変化して行きます。特に、子供の年齢や家庭の状況に応じて言語使用の方針が柔軟に調整される過程や、親子間での言語使用に関する交渉の様子は家庭ごとに異なるダイナミックな特徴を持っています。さらに、FLP は家庭内の言語選択が教育や社会的圧力や政策といった、外部要因とどのように関係しているのかを明らかにし、言語をめぐる葛藤や交渉の背景を浮き彫りにします。こうした視点は、言語の継承や多言語社会における多様な家族の在り方を考える上で大きな意義を持つでしょう。FLP の研究は、個々の家庭に根差した具体的な事例から、社会全体の言語動態や文化的多様性を理解する手がかりも提供します。今後とも FLP の研究が進み、多様な家庭の言語実践が明らかになることで、言語と家族の関係についてさらに深い洞察が得られることが期待されます。

<引用文献>

- 片岡裕子・柴田節枝（2011）「国際結婚の子どもたちの日本語力と家庭言語：風説からの脱却と可能性に向けて」 *JHL Journal*,4
<https://www.aatj.org/resources/sig/heritage/ejournal/vol4.pdf>
- カルヴェ, ルイ・ジャン（2000）『言語政策とは何か』東京, 白水社.
- 段上知里・福田牧子・本林響子・横井幸子（2022）「ファミリー・ランゲージ・ポリシー：現状と今後の展望」, 『社会言語科学会第46回大会発表論文集』pp.273-292.
- Bakmand, B. (2000). National language planning, why (not)? *Journal of Intercultural Communication*, 3. <https://www.immi.se/intercultural/nr3/bakmand.htm>
- Barron-Hauwaert, S. (2014). *Language Strategies for Bilingual Families: The One-parent-one-language Approach*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Braun, A., & Cline, T. (2010). Trilingual families in mainly monolingual societies: working towards a typology. *International Journal of Multilingualism*, 7(2), 110–127. <https://doi.org/10.1080/14790710903414323>
- Braun, A. & Cline, T. (2014). *Language Strategies for Trilingual Families: Parents' Perspectives*. Bristol: Multilingual Matter.
- Bui, T. M. T., Turner, M., & Filipi, A. (2022). Including children's voice in family language policy: an exploration of the tensions between mothers' and children's language beliefs. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 45(7), 2863–2879. <https://doi.org/10.1080/01434632.2022.2077353>
- Canagarajah, A. S. (2006). The Place of World Englishes in Composition: Pluralization Continued. *College Composition and Communication*, 57(4), 586–619. <http://www.jstor.org/stable/20456910>
- Cobarrubias, J., & J. A. Fishman (1983). *Progress in language planning: international perspectives*. The Hague: Mouton de Gruyter.
- Cooper, R.L. (1989). *Language Planning and social change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Curdtt-Christiansen, X. L. (2009). Invisible and visible language planning: Ideological factors in the family language policy of Chinese immigrant families in Quebec. *Language policy*, 8(4), 351-375.
- Curdtt-Christiansen, X. L. (2013). Negotiating family language policy: Doing homework. In: Mila Schwartz and Anna Verschik (eds.) *Successful family language policy*. New York:

Commented [N13]: 英文文献のタイトルのイタリックが抜けていた点で、イタリックに変更しました。念のために、確認お願いいたします。

Springer. pp.277-295.

- Danjo, C. (2021). Making sense of family language policy: Japanese-English bilingual children's creative and strategic translanguaging practices. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 24(2), 292-304.
- De Houwer, Annick. (1999). 'Environmental factors in early bilingual development: The role of parental beliefs and attitudes', In: G. Extra., & L. Verhoeven (eds.) *Bilingualism and migration* (pp.75–96). Berlin-New York: Mouton de Gruyter.
- Döpke, S. (1992). *One Parent-One Language. An Interactional Approach*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Fishman, J.A. (1991). *Reversing language shift: Theoretical and empirical foundations of assistance to threatened languages*. Clevedon & Philadelphia: Multilingual Matters.
- Fukuda, M. (2021). Transmission of Japanese as a heritage language in the bilingual polity of Catalonia. A case study, *Journal of Asian Pacific Communication*, 31(2), 191 – 212. <https://doi.org/10.1075/japc.00064.fuk>
- King, K., & Fogle, L. (2012). Bilingual parenting as good parenting: Parents' perspectives on family language policy for additive bilingualism. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 9(6), 695-712. <https://doi.org/10.2167/beb362.0>
- Fogle, L. (2013). Parental ethnotheories and family language policy in transnational adoptive families. *Language Policy*, 12(1), 83–102. <https://doi.org/10.1007/s10993-012-9261-8>.
- García, O. (2015[2001]) Language policy. In: James D. Wright (ed.) *International Encyclopedia of the Social & Behavioral Sciences, Second Edition* (pp.353–359), <https://ofeliagarciadotorg.wordpress.com/wp-content/uploads/2011/02/languagepolicy.pdf>
- Grammont, M. (1902). *Observations sur le langage des enfants*, Paris: Mélanges Meillet.
- Guardado, M. (2017). Heritage language development in interlingual families. In P. P. Trifonas., & T. Aravossitas (eds.), *Handbook of research and practice in heritage language education* (pp. 1-17). Philadelphia/Heidelberg: Springer. https://doi.org/10.1007/978-3-319-38893-9_17-1
- Haugen, E. (1983). The implementation of corpus planning: Theory and practice. In: J. Cobarrubias., & J.A.Fishman (eds.). *Progress in language Planning* (pp.269-289). Berlin: Mouton.
- Jahr, E. H. (1992). Sociolinguistics: Minorities and sociolinguistics. In W. Bright (Ed.), *International encyclopedia of linguistics* (Vol. 4, pp. 12–15). New York: Oxford University Press.

- Keydeniers, D., Aalberse, S., Andringa, S., & Kuiken, F. (2021). Bilingual daycares in the Netherlands: an analysis of the implementation of bilingual input and underlying ideologies. *Current Issues in Language Planning*, 23(2), 157–175.
<https://doi.org/10.1080/14664208.2021.1939988>
- Kheirkhah, M. (2016). Chapter 10: Language Choice Negotiations in Parent-Child Interaction: Family Language Policy as a Collaborative Achievement, In: J. N. Singh., A.Kantara., & D.Cserzö (eds.) *Downscaling cultures: Revisiting Intercultural Communication* (pp.227-248). Cambridge Scholars.
- King, K. A., L. Fogle & A. Logan-Terry (2008). Family language policy. *Language and Linguistics Compass*, 2(5), 907-922. <https://doi.org/10.1111/j.1749-818X.2008.00076.x>
- King, K. A. (2000). Language Ideologies and Heritage Language Education. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 3(3), 167–184.
<https://doi.org/10.1080/13670050008667705>
- King, K., & Fogle, L. (2006). Bilingual Parenting as Good Parenting: Parents' Perspectives on Family Language Policy for Additive Bilingualism. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 9(6), 695–712. <https://doi.org/10.2167/beb362.0>
- De Klerk, V. (2001). The Cross-Marriage Language Dilemma: His Language or Hers? *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 4(3), 197–216.
<https://doi.org/10.1080/13670050108667728>
- Kopeliovich, S. (2010). Family Language Policy: A Case Study of a Russian-Hebrew Bilingual Family: Toward a Theoretical Framework. *Diaspora, Indigenous, and Minority Education*, 4(3), 162–178. <https://doi.org/10.1080/15595692.2010.490731>
- Lanza, E. (2007). Multilingualism and the family. In Li Wei & P. Auer (eds.), *Handbook of Multilingualism and Multilingual Communication* (pp.45-67). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Lanza, E. (2004). *Language Mixing in Infant Bilingualism: A Sociolinguistic Perspective*, Oxford: OUP.
- Lee, J.S., & Shin, S.J. (2008). Korean Heritage Language Education in the United States: The Current State, Opportunities, and Possibilities. *Heritage Language Journal* 6(2), 1-20.
www.heritagelanguages.org
- Lee, H., & Pang, M. E. (2021). Educational discourse and knowledge construction in family language policy: the case of a Korean transnational family. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 45(5), 1538–1551.
<https://doi.org/10.1080/01434632.2021.1996581>

- Lyon, J. (1996). *Becoming bilingual: language acquisition in a bilingual community*, Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Luykx, A. (2003). Chapter 2. Weaving Languages Together: Family Language Policy and Gender Socialization in Bilingual Aymara Households. In R. Bayley & S. Schecter (eds.), *Language Socialization in Bilingual and Multilingual Societies* (pp. 25-43). Bristol, Blue Ridge Summit: Multilingual Matters.
<https://doi.org/10.21832/9781853596377-005>
- Okita, T. (2002). *Invisible Work: Bilingualism, language choice and childrearing in intermarried families*. Amsterdam: John Benjamins.
- Pauwel, A. (2005). Maintaining the community language in Australia: Challenges and roles for families. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 8(2), 124-131.
- Revis, M. (2017). Family language policy in refugee-background communities: Towards a model of language management and practices, *Journal of Home Language Research* 2, 40-62. <https://doi.org/10.16993/jhlr.30>
- Ricento, T. (Ed.). (2006). *An Introduction to Language Policy: Theory and Method*. London: Blackwell.
- Rubin, J., & Jernudd, B. H. (eds.) (1971). *Can Language be Planned?: Sociolinguistic Theory for Developing Nations*. University of Hawai'i Press.
<https://doi.org/10.2307/j.ctv9zckn9>
- Saunders, G. (1982). *Bilingual children: Guidance for the family*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Saunders, G. (1988). *Bilingual children: from birth to teens*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Schwartz, M. (2008). Exploring the Relationship between Family Language Policy and Heritage Language Knowledge Among Second Generation Russian–Jewish Immigrants in Israel. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 29(5), 400–418.
<https://doi.org/10.1080/01434630802147916>
- Schwartz, M. (2010). Family language policy: core issues on an emerging field. *Applied Linguistics Review*, 1, 171-192.
- Shohamy, E. (2003). Implications of Language Education Policies for Language Study in Schools and Universities. *The Modern Language Journal*, 87(2), 278–286.
<http://www.jstor.org/stable/1193038>
- Shohamy, E. (2006). *Language Policy Hidden Agendas and New Approaches*, London: Routledge.

- Shohamy, E. (2015). LL research as expanding language and language policy, *Linguistic Landscape An international journal*, 1(1-2),152-171.
- Smith-Christmas, C. (2016). *Family Language Policy - Maintaining an Endangered Language in the Home*, Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Smith-Christmas, C. (2021). Using a 'Family Language Policy' lens to explore the dynamic and relational nature of child agency, *Children & Society*, 36(3), 354-368.
<https://doi.org/10.1111/chso.12461>
- Spolsky, B. (2004). *Language policy*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Spolsky, B. (2007). Towards a Theory of Language Policy. *Working Paper in Educational Linguistics*, 22, 1-14.
- Spolsky, B. (2009). *Language management*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Spolsky, B. (2012). Family language policy – the critical domain. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 33(1), 3–11.
<https://doi.org/10.1080/01434632.2011.638072>
- Takeuchi, M. (2006). The Japanese Language Development of Children through the 'One Parent–One Language' Approach in Melbourne. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 27(4), 319–331. <https://doi.org/10.2167/jmmd441.1>
- Tollefson, J.W. (1991). *Planning Language, Planning Inequality*, London: Longman.
- Tuominen, A. (1999). Who decides the home language? A look at multilingual families, *International Journal of the Sociology of Language*, 140, 59-76.
<https://doi.org/10.1515/ijsl.1999.140.59>
- Yates, L., & Terraschke, A. (2013). Love, language and little ones: successes and stresses for mothers raising bilingual children in exogamous relationships. In M. Schwartz, & A. Verschik (Eds.), *Successful family language policy: parents, children and educators in interaction* (pp. 105-125). (Multilingual education). Springer, Springer Nature.
- Yazan, B., & Ali, I. (2018). Family Language Policies in a Libyan Immigrant Family in the U.S.: Language and Religious Identity. *Heritage Language Journal*, 15(3), 369-388.
<https://doi.org/10.46538/hlj.15.3.5>
- Walsh, J. (2012). Language policy and language governance: a case-study of Irish language legislation, *Language Policy*, 11, 323–341.
- Wilson, S. (2020). *Family Language Policy. Children's Perspectives*, Cham: Springer Nature.
- Zhang, H., Shi, Y., & Li, Z. (2022). Family language policy in multi-ethnic and multilingual villages in Yunnan, China: a comparative case study of Kena village and Anmin village. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 45(9), 3846-3861.

<https://doi.org/10.1080/01434632.2022.2126486>

* 本稿は、MCIN/AEI (10.13039/501100011033) および FEDER (EU) によって資金提供を受けたプロジェクト (PID2021-122897NB-I00) の一環である。